

「USKOLLINEN NAAPURI『容疑者Xの献身』を読む」開講のお知らせ(フィンランド語)

日時

4月26日(月) 10:00- オリエンテーション(授業料は発生しません)

講師自己紹介、教材説明、フィンランドの電子書籍購入の説明

5月10日(月) 10:00-11:30 1期目授業開始

以後、基本的に毎週月曜10:00-11:30の実施です

対象

suomea suomeksi 1, 2やフィンランド語トレーニングブックなど、教科書を最後まで勉強してフィンランド語文法の知識を一通りお持ちの方
本講座では特に、分詞構文やe不定詞(第二不定詞)内格・具格の時相構文が頻出します。それらを学習済みであることが前提となります。

教材について

以下の書籍をご自身でご用意いただきます。

・容疑者Xの献身, 東野圭吾著, 文藝春秋

・Uskollinen naapuri, Keigo Higashino著, Raisa Porrasmaa訳, Kustantamo Punainen Silakka (標準文字サイズで351ページ)

*特にフィンランド語版Uskollinen naapuriは電子書籍を想定しています。スマートフォンもしくはタブレットが必要です

申込

メールタイトルを「容疑者X講座申込」にして

①お名前

②修了した教科書(suomea suomeksi, フィンランド語トレーニングブックなど)

③質問・要望など講師に伝えたいこと何でも

を記載の上 yosh.tsukano@gmail.com へ送信してください

授業料

1期(10回)13,000円を期の開始前に頂戴します(全4期)

振込先は申し込んだメールへの返信でお知らせいたします。

内容

昨年出版されたフィンランド語版容疑者Xの献身、Uskollinen naapuriを読んでいくzoomを使用したオンライン講座です。教科書で学んだフィンランド語文法が実際にはどのように使われているのか、日本語らしい言い回しを翻訳者はどのようにフィンランド語に訳したのか、そういった視点でUskollinen naapuriを読んでいきます。ストーリーを知らないと授業中ハラハラドキドキしてフィンランド語の解説が頭に入らないと思うので、事前に日本語で「容疑者Xの献身」を読んでおかれることを強くお勧めいたします。

長編小説なので、全4期の1年では終わりません。続きを扱う2年目の開講も予定しています。

Kadun varrella oli kyltti, jossa luki BENTENTEI. Pienessä puodissa myytiin bentō-aväsrasioita. Ishigami avasi lasioven.

"Irrashaimase. Hyvää huomenta", tiskin toiselta puolelta tervehti tuttu ääni, joka sai Ishigamin olon virkeäksi. Valkoiseen lakkiin pukeutunut Yasuko Hanaoka tervehti tulijaa hymyillen. Myymälässä ei ollut muita asiakkaita. Se sai Ishigamin vieläkin paremmalle tuulelle.

”Hetkinen... Päivän annos.”

”Selvä, yksi päivän annos. Paljon kiitoksia.”

Naisen ääni oli iloinen, mutta Ishigami ei nähnyt hänen ilmettään. Hän ei katsonut myyjätärtä kasvoihin vaan kurkisti lompakkoonsa. Rouva Hanaoka asui hänen naapurissaan, mutta Ishigamin mieleen ei silti juolahtanut yhtäkään puheenaihetta eväsrasiatilauksen lisäksi.

Maksaessaan ostoksen hän sai lopulta lausahdettua: ”Onpa kylmä.” Vaimea mutina kuitenkin hukkui oven aukeamisesta kantautuvaan ääneen seuraavan asiakkaan astuessa sisään, ja Yasukon huomio siirtyi jo uuteen tulijaan.

Ishigami poistui liikkeestä bentō-rasia kädessään ja suuntasi uudestaan Kiyosubashin suuntaan. Hän oli tehnyt ylimääräisen lenkin piipahtaakseen Bententeissä.

道路に面して、『べんてん亭』という看板が出ている。小さな弁当屋だった。石神はガラス戸を開けた。

「いらっしやいませ。おはようございます」カウンターの向こうから、石神の聞き慣れた、それでいていつも彼を新鮮な気分にする声が飛んできた。白い帽子をかぶった花岡靖子が笑っていた。

店内にはほかに客はいなかった。そのことが彼を一層浮き浮きさせた。

「ええと、おまかせ弁当を……」

「はい、おまかせひとつ。いつもありがとうございます」

彼女が明るい声でいったが、どんな表情をしているのかは石神にはわからなかった。まともな顔を見られず、財布の中を覗き込んでいるところだったからだ。せっかく隣に住んでいるのだから、弁当の注文以外のことを話そうと思うのだが、話題が何ひとつ思い浮かばない。

代金を支払う時になってようやく、「寒いですね」といつてみた。だが彼のぼそぼそと呟くような声は、後から入ってきた客のガラス戸を開ける音にかき消されてしまった。靖子の注意もそちらに移ったようだ。

弁当を手にも、石神は店を出た。そして今度こそ清洲橋に向かった。彼が遠回りをする理由、それは『べんてん亭』にあった。

講師

塚野芳美(西野芳美)

北海道斜里郡生まれ。北海道大学文学部在学中フィンランド語と出会い、取り憑かれたように勉強の日々を送る。フィンランドのオウル大学人文学部フィンランド語学科に4か月の交換留学。卒業後は日本の一般企業に9年勤務するも、フィンランド語は細々と続ける。結婚を機に上京後、フィンランド語を教えるのが上手いと褒められたのが切っ掛けでうきうきと講師活動を開始。フィンランドの大学を卒業した、とか、フィンランドにもう何年も住んでいる、とか、そういった文言がなくパツとしない経歴ですが、これでもフィンランド語だけはよく褒められます。ただ、コツコツと続けてきただけの人間です。